

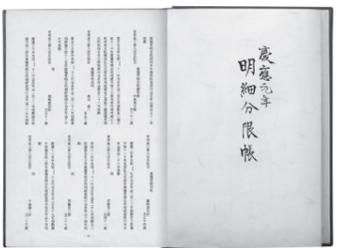
薬種目利森田家の先祖を訪ねて

森田 和之

2014年10月29日、新興善国民小学校卒業70周年記念同窓会に参加するため帰省。戦争に明け暮れ、軍国少年・少女に徹して過ごした6年間。更に、原爆被災、敗戦、学制改革にもまれて社会に飛び出した卒業生300余名。当日、元気に参加出来たのは29名だった。

70余年前の懐かしい話に盛り上がったが、過疎化で新興善、勝山、磨屋の3校が統廃合し、新興善小学校は既に廃校になり、学校の跡地には立派な市立図書館が建っていた。

幼い頃、15年前に他界した父健吾から、先祖は薬種目利をしていたと聞いていたので、久し振りに県立図書館を訪れ、父が残したメモを頼りに資料を探した。親切なスタッフから、故渡辺庫輔先生の慶応元年調査明細分限帳を紹介され、越中哲也先生の解題『長崎分限帳』も拝読し、長崎地役人分限帳の解明に辿り着く手懸りが出来た。翌日は、初めて小学校跡に建てられた市立図書館を訪ねた。幸い翌日の「文化の日」に第7回長崎学講座で「焼物から魅せる長崎」について越中哲也先生の講演会開催をポスターで知り、楽しく拝聴した。ご高齢にも係らずご壮健な先生に初めてご挨拶したら、父の事をよく覚えて下さり感動した。帰京後直ぐに、「ながさきの空」をお贈り下さり、薬種目利と森田家について投稿をお願いされたが、私の研究は未だ緒に就いたばかり。身に余る突然の事で、戸惑いながらも、60余年学び、係ってきた医薬の道にも繋がる興味も湧き取り組んでみた。



『長崎明細分限帳』(長崎歴史文化協会発行)

長崎の皓台寺の森田家の墓地に行くと、薬種目利の森田四郎三郎、森田甚八、森田健次郎、直ぐ近く上方に、薬種目利頭取 中嶋真兵衛、眼下には中嶋(猪股)藤十郎(祖母の伯父)が眠っていた。隣接の墓地山本家は武田信玄の

四七年(弘化四)見習・同六五年(慶応元)目利

旧引地町の自宅の薄暗い蔵には、最後の薬種目利であった曾祖父森田健次郎により、多くの骨董品、生薬標本等貴重な資料が収められていた。だが、原爆で全て焼失し、薬種目利の実情を語れない事を残念に思っている。戦後、中国・漢口診療所勤務から無事引揚げてきた父も嘆いていた。

私は80年近く前になるが5歳の頃、長崎大病院の薬剤部に父に連れられて行っていた記憶がある。院内で使う注射アンプル剤を父が作っているのを見るのが珍しく、興味を持っていた。清潔なタイル張りの床の注射剤製造室に、大きな滅菌機が置かれ、手術着を着た父が、ビュウレットから1本1本アンプルに薬液を充填し、ガスバーナーで熔閉する。その型が奇麗に揃っており、父が手品師のように見えた。その後入念に蒸気滅菌し、ラベルを貼って出来上がっていた。

我が家の床の間には、怖い顔した神農様の軸が掛けてあった。先祖には、薬種目利もいて、長崎は昔から唐人貿易が盛んで、中国からの輸入薬の鑑定役もしていたようだ。

私は1955年に大学を出て薬剤師免許を取得後、筑豊で石炭企業の大病院薬剤部に勤務し、調剤、院内製剤に6年間従事後、1961年から東京の製薬企業に勤め、研究所で新薬の製剤、防湿包装素材の研究を始め、埼玉県の製剤工場の生産技術研究所で新製品製剤包装技術に従事するなど、製薬に関する企業で仕事をしていた。

製薬企業を退職後暫くフリーでいたが、NPO-QA(医薬品・食品品質保障支援)センターから、東京のメンバーで「東京会」を立上げるよう勧められ、2007年11月に5名で立上げ続けた。2012年の80歳を期に引退、皆様をお願いして東京会を一新して頂き、新しくスタートして頂いた。今後は業務内容、組織などを共に充実して進展することを願っている。

(長崎出身 東京在住)

風信

〇二月は何か色々な事の多い月でしたが、三月は桃節句に始る迎春。本会桶屋町事務所でも三月より次の講座を再会しますので御自由に御参加下さい(会費不要) 講座関係のお問い合わせは事務局(八二二一五四〇)まで

長崎学講座 毎週月曜日午前十時半より。(資料代各位)

古文書を読む会 毎月第一・第三火曜日 午前十時半より。

軍師・山本勘助の子孫と以前墓の主に聞いたが、洋式砲術の山本晴海、航海術の竹内貞基、フランス学の山本松次郎の立派な案内板も立てられ、方々から声が聞えて来るようだった。

『明細分限帳』には長崎奉行が設けた独特な諸役人として、代官、年寄、乙名、町使、散使、唐通事などが紹介されている。目利については、輸入物資の価値判定や違法物資の輸入監視の専門役人として、端物目利、唐絵目利、唐物目利、書物目利、茶碗薬目利、鹿皮目利、薬種目利などが設けられているが、その中でも、薬種目利に最も多くの人数が任命されている。薬種目利を最初に配置したのは、寛永6年(1629)頃で10人任命されている。

森田の先祖は大野姓の難波の武士で、豊臣秀頼に仕えていたが大坂城落城後長崎に下り、大城姓に改め、新屋と号して商人となったが、初代大城治郎左衛門が、寛文元年(1661)薬種目利に任命された。享保6年(1721)の「諸役科帳」によると12人の薬種目利の中に5代大城才右衛門が列している。薬種目利は、その後慶応元年(1865)頃まで続いていた。其の後、大城姓は薬種目利の役名である森田氏に改められている。初代から数えると私は15代になる。

様々な事情により変遷が見られ、長崎の役人の構成、人数も増減している。236年間の各年毎の役名と名前を全部は確認できないが、今回は森田家の先祖のなかで確認されたものを紹介させて頂きたい。

- 大城治郎左衛門 一六六一年(寛文元)目利、大城才右衛門 一七二二年(享保六)・同五〇年(寛延三)目利、森田甚兵衛 一八二二年(文化九)・一八二四年(文化十一)目利、一八一九年(文政二)・同二十年(文政三)頭取、森田四郎三郎 一八二四年(文政七)・同二八年(文政十一)目利、森田甚八 一八三七年(天保八)・同四〇年(天保十一)・同四七年(弘化四)・同五一年(嘉永四)・同六五年(慶応元)目利、森田健次郎 一八

水曜懇話会 毎週水曜午後一時半より。

長崎食の文化サークル 毎月第二・四金曜日 午後二時より。

〇三月は桃の節句。昔は旧暦の三月三日(現在四月二十一日)を上巳の日と定め「巳日祓」の風習があり「源氏物語須磨巻」にも此の日、人形を舟に乗せて流したと記してある。室町時代になると草餅、団子の事があり、江戸時代になると初節句の家での人形かざりや雛見物にて賑わい五日に納むとある。

〇次に長崎の春には「ハタあげ」がある。ハタあげについては渡辺庫輔先生の『長崎ハタ考』、古賀十二郎先生編纂の『長崎市史風俗編』を読まれると良い。

〇三月十八日は、彼岸の入り、御中日(春分)は二十一日とある。彼岸の語源は梵語の Parvāna であり死後の極楽浄土の意であるという。長崎・野母脇岬の観音寺には元亨訳書(二二三年刊)によると「其昔、此の地にて彼岸の日、極楽浄土が空中に浮び出た」と記してある。弘法大師も行かれたという観音寺の佛像は平安末の作として国指定文化財でもあり参詣に行かれるとよい。

〇今回、長崎県庁は新幹線開発の事もあって長崎開港の時より歴史のあった森崎の地を離れ、浦上川の河口、長崎駅の隣に移るとの事、これによって長崎の街も大いに変化してくる事でしょう。原爆の大災害にも負けず昔の長崎の面影を復活してこられた長崎の町、長崎の年中行事「おくんち」や「お盆の精霊流し」等は伝え残しておきたいものですね。

〇それにしても今年の新天地町を中心にしたランタンフェスティバルは大盛會。中国からの観光客も多く、来年も是非長崎において下さるようお願いしたい。

〇先日大阪旭食品の高田常務来訪。「本社で販売しているポンズの語源は長崎とおきぎしたので訪ねて参りました。」との事。

〇本月ご寄贈いただいた書冊
一、宮田修二氏より『薩摩と長崎の交流』。長崎鹿児島県人会創立五〇周年記念誌として発刊。西郷翁・薩摩墓・佐古招魂社と鹿児島等、参考となる資料多く収録されていた。

一、土肥原弘久氏より『長崎に亀山社中あり』。亀山社中ば活かす会刊。第一章・第二章あり(土肥原氏編著)。亀山社中と言えば坂本龍馬であり其の歴史と魅力が記されている。

〇平成二十七年「ながさきの空第二十六集」発刊。御希望の方は十八銀行本店及び各支店、又は事務局(分室)までお問い合わせ下さい。(八二二一五四〇)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 2F

